埼玉県立
歴史と民俗の博物館
THE MUSEUM
彩の国埼玉県
Vol.16-2 第47号 2022.3.17
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

武術・武道は、日本の運動文化を体現する無形の文化遺産です。

江戸時代中期以降、埼玉県域でも本格的な武術の指導を行う諸流派が登場し、多くの人々が入門しました。また、本県ゆかりの武芸者の中には、幼少の頃から剣術を学んだ渋沢栄一など、武術以外の分野にも功績をのこした偉人が少なくありません。

本展では、剣術・柔術を中心とする、埼玉県ゆかりの武術諸流派や歴史上に名をのこした武芸者などを紹介します。

平成18年（2006）12月、教育基本法が改正され、同20年3月には学習指導要領が改訂されて、それまで選択制であった武道が、中学校第1・2学年の保健体育で必修化されることとなりました。

歴史をひもとけば、明治時代にも剣術・柔術等の旧制中学校正課への編入が建議され、3度の審議を経て、明治41年（1908）に帝国議会で可決されています。この建議を主導したのは、福岡河岸（現ふじみ野市）の星野仙蔵や、埼玉郡桑崎村（現羽生市）の小澤愛次郎でした。星野・小澤はともに本県出身の政治家であり、剣術の達人でもありました。

また、埼玉県は、講道館柔道を創始した嘉納治五郎の師である福田八之助、近代剣道の発展に多大な功績をのこした「剣聖」高野佐三郎の出身地でもあります。本県域の武術文化が、こうした偉人たちを輩出する母胎となったことは疑いありません。

そもそもタイトルにある「英名録」とは、武芸者が廻国修行（武者修行）を行う際、訪問先で相手方の名前や流派名、日付等を記入する帳簿を指します。武術にまつわる埼玉県ゆかりの諸流派や偉人が一堂に集う「英名録」たること、これが本展開催の主眼となります。

展示は全5章構成で、各章の概要は以下のとおりです。

プロローグ　江戸時代の武術文化

日本の武術諸流派が成立したのは、主に室町時代以降のこととされます。戦国の世が終わりを告げて天下泰平の江戸時代になると、武術は徐々に実戦性を失い、形式を重んじるようになっていきます（いわゆる「華法化」）。

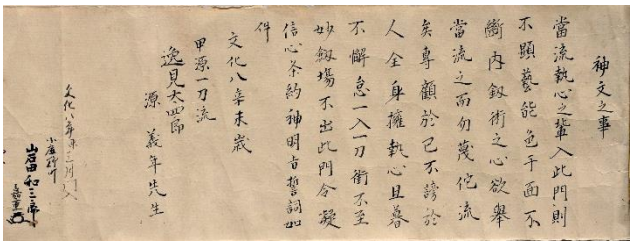
久喜市指定文化財　皇国武術英名録　一～五

（個人蔵、久喜市公文書館寄託）

一方で、江戸時代中期には幕府によって武術が奨励され、数多くの新流派が生まれていきました。また、従来の二人一組で形を行う稽古に対し、剣術では竹刀・防具を用いて打ち合う「撃剣」が、柔術では自由に技を掛け合う「乱捕（乱取）」が行われるようになり、これが現代の剣道・柔道にも継承されていくこととなります。

第1章　埼玉ゆかりの武術諸流派

江戸時代中期以降、埼玉県域でも、道場を構えて本格的な武術指導を行う諸流派が登場します。剣術では、甲源一刀流・神道無念流・柳剛流・馬庭念流、柔術では、気楽流・起倒流・真之神道流などが知られています。また、特定の比較的狭い地域でのみ行われた奥山念流・真之真石川流といった流派も存在しました。それらの指導者・入門者は、武士だけでなく多数が農民であったことが特徴と指摘されています。



小鹿野町指定文化財　甲源一刀流神文書（個人蔵）

横瀬町指定文化財　気楽流柔術　鎖鎌

（横瀬町歴史民俗資料館蔵）

第2章　歴史の中の武芸者たち

本県ゆかりの武芸者の中には、武術のみならず、政治・社会などの分野に大きな影響を与えた偉人も少なくありません。例えば、「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一は、自身も神道無念流等を修めた武芸者である上、長年講道館の役員を務めるなど、武術・武道の振興にも注力しています。また、秩父郡野上村（現長瀞町）出身の福田八之助は、安政3年（1856）に江戸幕府が開いた軍事訓練機関である講武所で柔術の指導者に登用されました。草莽の志士・好古家として著名な根岸友山・武香父子、江戸城無血開城の立役者である山岡鉄舟も、本県とゆかりの深い武芸者です。

磯道場柔術会の図（公益財団法人講道館蔵）

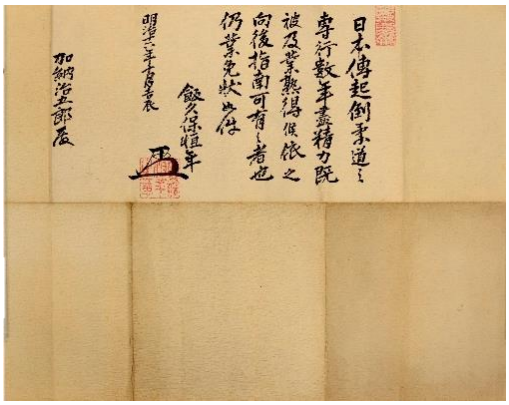
渋沢栄一所用　変 塗鞘脇差　拵

（国文学研究資料館蔵）

第3章　武術の近代化

明治時代以降、武術も近代化されていきます。その要点は多岐にわたりますが、既存の諸流派を比較検討して理論を統一・体系化したことや、試合・審判ルールを制定したこと、修養・教育的側面を重視したことなどが挙げられます。中心となってこれを推進したのが、柔術においては福田八之助の弟子嘉納治五郎で、剣術においては「剣聖」と呼ばれた秩父出身の高野佐三郎でした。いずれも本県ゆかりの人物である点は特筆されます。

また、嘉納は見世物化などによって低下した武術に対するイメージを払拭すべく、従来一般的であった「柔術」ではなく「柔道」の呼称を採用しました。剣術でも、明治時代末から大正時代初め（1910 年代前半）頃には、「剣道」の呼称が定着したとされています。

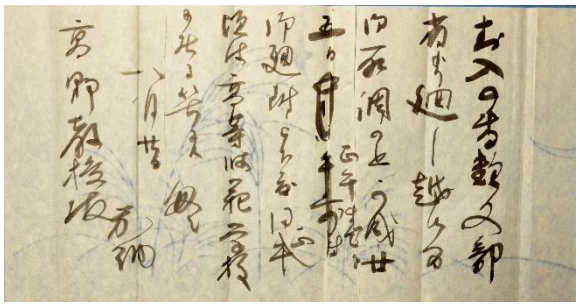


嘉納治五郎宛　起倒流免状（公益財団法人講道館蔵）

伝高野佐三郎所用　稽古着（個人蔵）

エピローグ　武道からbudoへ

江戸から昭和の激動の時代を生き抜き、現代につながる柔道・剣道の礎を築いた嘉納と高野は、東京高等師範学校の校長・教員として同僚であり、公私にわたって交流がありました。本章では、その交流の一端を紹介するとともに、嘉納と高野が武道の国際化に果たした役割についても概観します。



高野佐三郎宛　嘉納治五郎書簡（個人蔵）

武術・武道を中心テーマとする展覧会は、当館50年の歴史の中で初めての試みとなります。この機会にぜひ、本県の豊かな運動文化の一端に触れていただければ幸いです。

（展示担当　根ヶ山泰史）

企画展「埼玉武術英名録」
会期：令和4年3月19日（土）～5月8日（日）
（休館日：月曜日ただし3月21日、5月2日は開館）
会場：当館　特別展示室

表紙掲載資料
左上　奥山念流御芸目録より（個人蔵）
右上　天神真楊流柔術稽古衣（嘉納治五郎所用、公益財団法人講道館蔵）
左下　江戸時代の剣術防具（個人蔵）
右下　磯道場柔術会の図より（公益財団法人講道館蔵）

埼玉県のお茶といえば、「狭山茶」が広く知られていますが、秩父地域や県東部などでもお茶の生産が続けられています。また、お茶の葉は収穫しただけでは、飲み物にはなりません。お茶の葉を蒸し、揉(もん)み、火を加え乾燥させることで、飲み物のお茶が出来上がります。展覧会では、お茶生産の様子がわかる錦絵をはじめ、お茶を作る製茶用具や製茶機械、お茶を飲む様々な茶器を展示し、お茶が生産・販売され、私たちのもとに届くまでを紹介しました。展覧会のコンセプトは、急須でお茶を楽しむ人を増やすこと。本稿では、企画展「お茶を楽しむ」を振り返ります。

図1　お茶摘み体験（春日部市）

プロローグ　お茶のいろは

ひとくちにお茶といっても、緑茶（煎茶(せんちゃ)）、紅茶、ウーロン茶など様々な種類のものがあります。これらの茶葉は、全て同じ茶の木、同じ茶葉から作ることができます。発酵(はっこう)の進み加減の違いによって、緑茶をつくる茶葉が紅茶やウーロン茶にもなるのです。本章では、知っているようで知らない、お茶の特徴や魅力をパネルやスライドで紹介しました。また埼玉県茶業研究所から提供いただいた製茶機械の工程段階の茶葉も展示しました。

第１章　埼玉のお茶生産

現在につながる狭山茶の生産は、享和2年（1802）頃から始まりました。明治時代になり、国の重要輸出品となったお茶の生産は全国的に奨励されます。明治8年（1875）には、狭山製茶会社（狭山会社）が設立され、外国へ直接お茶を輸出することが可能となりました。明治時代以降、狭山茶産地に限らず埼玉県内各地に茶業組合ができ、広い範囲でお茶が生産されるようになります。昭和3年度の製茶産額番付表には、県内すべての郡でお茶の産出があったことが記されています。本章では、埼玉県におけるお茶生産の歴史を紹介しました。

第２章　お茶をつくる

収穫したお茶の葉のことを生葉(なまは)といい、生葉を蒸し、揉(もん)み、乾燥させることで、一次加工品の荒茶となります。手作業でつくられるお茶は上質な仕上がりとなりますが、作業に時間や労力がかかります。そのためお茶の生産は、明治中期から大正時代にかけて機械化が進み、現在のお茶生産も大半が機械を使って行われています。本章では、収穫した生葉が飲み物のお茶になるまでの過程を紹介しました。絵とともに製茶用具を展示し、手作業でお茶をつくる様子がわかるように工夫しました。

図2　製茶用具の展示風景

またお茶づくりの機械を発明した人物に、日高市出身の髙林謙三(たかばやしけんぞう)がいます。明治31年（1898）に髙林謙三が発明した茶葉粗揉機(ちゃばそじゅうき)の基本動作は、現代の機械にも応用されています。

図3　高林式粗揉機

第３章　お茶を売る

明治時代に県内でお茶の生産が盛んになると、生産者がお茶の集積を行う問屋業へと展開することもありました。狭山茶産地では、昭和30年代以降になると、生産者自らが店舗を開設し、小売販売を始める「お茶屋」となります。この生産、製造、販売を一括して行う形態を「自園・自製・自販」といい、狭山茶の特徴となっています。下図で紹介しているのは、繁田園のポスターです。繁田園は販売に力を入れていたお茶屋で、大正時代に宣伝用のポスターや、ハガキなどを数多く製作し、狭山茶の販路を拡げました。

図4　繁田園ポスター

第４章　お茶を飲む

お茶の飲み方は時代とともに変化していきます。江戸中期には味と香りの良い緑色の蒸し製煎茶が考案され、武士などの上流階級の人が急須を使ってお茶に親しみました。一方、江戸時代～明治時代にかけて、庶民が日常的に飲んでいたのは、土瓶や鉄瓶で煮出した番茶でした。急須でお茶を飲むことが大衆化するのは、大正時代～昭和初期にかけてのことです。その後、時代とともにお茶の飲み方は多様化していきます。平成以降、ペットボトル飲料やティーバッグなどの普及により、手軽にお茶が飲めるようになりました。本章では、土瓶や急須が描かれた錦絵のほか、鉄瓶や急須、多彩なデザインのお茶の缶やペットボトルを展示しました。

エピローグ　今、お茶がおもしろい

お茶の飲み方が多様化したことにより、急須でお茶を飲む機会が少なくなっているのではないでしょうか。葉っぱのお茶が売れないと、お茶屋の利益が少なくなり、家業を継承していくことが困難となってしまいます。本章では、現在埼玉県でつくられている様々なお茶のパッケージを展示したほか、茶業関係者らによるお茶の消費拡大の取り組みを紹介しました。

図5　博物館オリジナルパッケージの狭山茶

また埼玉県茶業青年団の協力により、博物館オリジナルパッケージで狭山茶の販売を行いました。狭山茶の販売は終了しましたが、展覧会ブックレット「お茶を楽しむ」は現在も販売中です。展示内容の紹介に加え、「おいしいお茶の淹れ方」や「あなたにおすすめのお茶」なども紹介しています。ご興味のある方はぜひお買い求めください。この展示をきっかけとして、「急須でお茶を楽しむ人」が増えれば幸いです。

（展示担当　町田歩未）

鉢形城歴史館×埼玉県立歴史と民俗の博物館

共催展「昌国寺」

令和 3 年度、歴史と民俗の博物館は開館 50 周年を迎え、より多くの県民の皆様に当館の活動を紹介するため、地域と連携した展覧会を開催します。本展では、鉢形城歴史館と共催し、寄居町赤浜の昌国寺を取り上げます。

※鉢形城歴史館で開催します。会場にご注意下さい。

昌国寺は、戦国時代末期の天正年間(1573～92)に水野石見守長勝が屋敷跡に開基した曹洞宗寺院です。長勝は、最初織田信長に仕え、本能寺の変後には鉢形城を守る小田原北条氏一族の北条氏邦に従います。鉢形開城後は、徳川家康の従兄弟であったところから 800 石の旗本に取り立てられます。水野家は、後に 6,000 石の大身旗本家となり、昌国寺を菩提寺とします。この昌国寺は、歴代将軍から 20 石の朱印地を賜わり、その朱印状や水野家が奉納した肖像画や什物などの文化財が数多く残されています。境内には、水野家歴代の墓石、また陣屋跡の堀や石垣が残るなど、歴史と文化財の宝庫といえます。

当館では、昭和 53 年から昌国寺が所蔵する資料を受託し、常設展示でその一部を展示活用してきましたが、昌国寺について紹介する機会はありませんでした。そこで本展では、鉢形城歴史館と共催して、当館が受託する昌国寺資料を地元寄居町に里帰りさせていただき、また同寺に残る什物を合わせて展示公開します。普段、歴史と民俗の博物館をご利用いただくことが難しい方々をはじめ、県内外の多くの方々にとりまして昌国寺の歴史や貴重な文化財をご覧いただく機会となれば幸いです。

主な展示資料

徳川家康朱印状及び歴代将軍朱印状、朱印状櫃・絵符、綸旨、木造如意輪観音像、太鼓、涅槃図、水野忠貞画像、薙刀(銘・加州住藤原光国)、黒漆塗鞍・鐙など

関連事業

(1)歴史講座

①「鉢形北条氏と水野長勝」

講師　石塚三夫氏(鉢形城歴史館　館長)

日時:4月30日(土)13時～14時30分

②「昌国寺と旗本水野家」

講師　中村陽平氏(埼玉県立嵐山史跡の博物館　学芸員)

日時:5月7日(土)13時～14時30分

会場:寄居町中央公民館ホール　　定員:70名

(2)昌国寺現地見学会

日時:5月8日(日)10時～12時

集合:東武東上線　男衾駅前　定員:20名

コース:男衾駅～昌国寺～出雲祝神社～小被神社～男衾駅

※(1)(2)申込方法:開催日の 1 カ月前から、電話にて鉢形城歴史館(048-586-0315)へ。先着順

(3)展示解説

日時:①4月30日(土)15時～

②5月 7日(土)15時～

申込方法:事前申込不要。要観覧料

会期:令和4年4月16日(土)～6月5日(日)

(休館日:4月18、25日、5月6、9、16、23、30日)

会場:鉢形城歴史館企画展示室

〈大里郡寄居町大字鉢形 2496-2/TEL048-586-0315)

開館時間　午前 9 時 30 分～午後 4 時 30 分

(入館は午後 4 時まで)

観覧料:一般 200 円(団体半額)

学生等 100 円(団体半額)

※70 歳以上、中学生以下、障害者手帳をお持ちの方は無料

※20 名以上の団体の場合は、半額

交通:自動車:関越自動車道花園IC国道 140 号バイパスを秩父・長瀞方面へ6km　15分

電　車:JR 八高線・秩父鉄道・東武東上線寄居駅下車　徒歩 25 分

バ　ス:寄居駅発イーグルバス・和紙の里行「鉢形城歴史館前」下車　徒歩 5 分

※新型コロナウイルス感染症感染拡大の状況により、日程等が変更される場合がありますので、鉢形城歴史館HP等をご確認ください。

【展示担当:杉山正司・西川真理子】

紙本着色涅槃図(部分、昌国寺蔵)

朱印状櫃(昌国寺蔵)

近世絵画の世界

当館の美術展示室では、令和3年12月21日（火）～令和4年3月27日（日）まで、「近世絵画の世界」と題して、所蔵品の中から、江戸時代の絵画を中心に展示しています。

会期中に展示替えを3回行いました。第1期「新年の祝い」では、中国の仙人や福の神が登場する作品、立身出世と長寿の象徴である鯉と亀を描いた葛飾北斎の肉筆画などを展示しました。

埼玉県指定文化財　葛飾北斎筆「鯉亀図」（当館蔵）

第2期「山水に遊ぶ」では、美術史において重要な画題の一つである「山水」をテーマに取り上げました。なかでも、渡辺崋山の門下で文人画家の福田半香が描いた「山水図屏風」（個人蔵）は、画中に悠然とした山々や水辺が広がり、舟遊びに興じる人の姿などが見え、鑑賞者の心を和ませてくれます。自由に旅行することがままならない現状ではありますが、絵画の世界に身を委ねて、その自然を散策する心地を楽しめるのが、山水画の醍醐味ではないでしょうか。

現在開催中の第3期「春めく季節」でも、狩野探幽の「四季山水図」より春と夏の情景を描いた二幅、他にも初春にちなんだ浮世絵などを展示しています。

三代歌川豊国画「春宵梅ノ宴」（当館蔵）

当館が収蔵する近世絵画といえば、皆様は何を思い浮かべるでしょうか。例えば、今年7月の企画展で展示した「太平記絵巻」は、南北朝時代の争乱を絵画化したものですが、制作は江戸時代と考えられています。「平家物語」より、熊谷直実と平敦盛を扇の中に描いた「一の谷合戦図屏風」も海北友雪という江戸時代の絵師による作品です。

近世絵画には、江戸時代より遡る時代の出来事や物語を絵画化したものもあれば、当然、江戸時代に生きた人々の暮らしや文化、まなざしが感じられる作品もあります。

また、江戸時代には様々な流派の絵師が活躍します。今回の展示では、幕府や大名の御用を務め、伝統を重んじた狩野派や、古今の「詩書画」や自然の美を通じた心の交流を表現した文人画家の作品などを紹介しました。

江戸時代に限らず、現在も大衆の人気を得ている浮世絵は、錦絵と呼ばれる多色摺りの木版画と、浮世絵師の手で描かれた肉筆画に大別されます。肉筆画は一点ものであり、絵師の筆さばきを直接見ることができます。一方、錦絵は、彫師、摺師といった職人と絵師との共作であり、版元や資金援助をしたパトロンなどの連携を経て世に送り出されます。一枚の錦絵ができるまでの過程を想像しながら見てみると、錦絵の楽しみ方も変わってくるのではないでしょうか。

当館が所蔵する近世絵画には、川村碩布といった埼玉ゆかりの絵師などの作品もあります。今回展示できなかった流派や絵師についても、美術展示室で機会を設けて紹介したいと思います。

今回の展示が、近世絵画の多様で豊かな世界への架け橋となれば幸いです。

（展示担当　井上海）

埼玉の現代史を語る博物館資料

当館の常設展では「埼玉の人々のくらしと文化」をメインテーマに旧石器時代から現在まで(いわゆる「平成の大合併」のパネル展示が最も新しい内容です)の歴史と民俗や美術を紹介しています。

そのうち現代(昭和戦後期)の歴史については、戦後の改革や「昭和の大合併」についての展示、昭和 39 年(1964)の東京オリンピックと昭和 42 年(1967)の埼玉国体についての展示、そして高度経済成長期を生活用具や写真でふりかえる「あの頃のくらし」の展示などで構成されています。

このように埼玉県の現代史も常設展示の一部となっていますが、埼玉県が高度経済成長期に経験した急激な人口増加や社会の変容を考えれば、今後いっそうの充実が求められる部分といえます。ところが、こうした現代史を語らせるための館有資料は、実はそれほど多くないというのが実情です。たとえば高度経済成長期のくらしの変化を象徴するものとしてのいわゆる「三種の神器」のうち、白黒テレビや電気洗濯機は他の博物館からお借りしたものでした。

とはいえ、高度経済成長期からも長い時間が経過した現在では、ついこの間のことのように思われる当時の資料を収集することも簡単なことではありません。県民のみなさまからの善意の御寄贈などを通じて、少しずつこの時代の資料を増やしています。以下では、そうした資料のうちからふたつをみてみたいと思います。

写真1の自転車「マルワイ号標準車」は平成 25 年(2013)に御寄贈いただいたものです。一見ごくふつうの自転車のようですが、昭和 30 年代に購入されたもので、購入時からほとんど手が加えられていないものです。女性が工場に通勤するために購入したというものでした。

川口市の工場で自転車を生産していた山口自転車工場の製品で、さらに、自転車をテーマとした特集展示の調査のなかで、この自転車に取り付けられたペダルは、戦後に航空機部品から自転車ペダルの製造へと転換したメーカーである所沢市の三ヶ島製作所の最初期の製品であることがわかりました。埼玉県の産業を知るうえでも重要な資料であるといえます。

写真1　マルワイ号標準車

写真2　東芝電気ポット PL-4

写真2の電気ポットは令和 4 年(2022)に、かつて農業を営んでいた御家族から御寄贈いただいたもので、昭和 20 年代後半から 30 年代前半頃に東芝が製造・販売したものです。

アルミニウムと樹脂でつくられた美しいデザインで、県内の家庭でもこうした家電製品が使われ始めていたことがわかるものです。当館ではすでにこの頃の同社の家電製品カタログも収集していますので、あわせて活用することができます。

このような現代の資料の収集は、高度経済成長期以降の、より新しい時代のものも視野に入れながら、継続的に進めていく必要があると考えています。

（資料調査・活用担当　佐藤　美弥）

新型コロナウイルス禍における出前授業

当館では、県内の学校を対象とした出張型の授業を行っており、土器の観察・昔の道具体験・まが玉作り等を体験していただけるプログラムを御用意しています。当館の学芸員と教員籍の職員が授業に必要な道具・資料を当館から運び、授業を行います。

令和３年度（2021）も前年度に引き続き、多くの学校で出前授業を実施することができました。

■各プログラムのご紹介

【土器の観察】

土器の出前授業は、歴史を学び始める小学 6 年生が主な対象となっています。

縄文、弥生、古墳、平安の 4 つの時代の本物の土器を観察しながら実際に触れていただき、各時代の土器の特徴を実感することができます。

当館の学芸員が土器を触る際の注意点や観察のポイントを、当時の生活様式に関連させながら解説します。

土器の設置風景

【昔の道具体験】

昔の暮らしや道具について学び始める小学 3 年生が主な対象です。

当館の学芸員が道具や時代背景等について解説します。

石臼、洗濯板とたらい、天秤棒と水桶、背負い梯子と背負い籠を実際に使用してもらいます。

電気やガス、水道がなかった時代に使われることが多かった道具を使ってみることで、当時の暮らしを体験し、現在使用されている道具との違いや共通点、工夫されていた点などを実感できます。

体験用の洗濯板とたらい

【まが玉作り】

土器の観察と同様に、小学 6 年生から要望の多いプログラムです。

当館のゆめ・体験ひろばのものづくり工房でも行っているまが玉作りを学校でも体験できるプログラムとなっています。こちらのプログラムは材料費が必要となりますが、必要な道具などは当館が御用意いたします。作り始める前に、まが玉についての解説も行っています。

■新型コロナウイルス感染症拡大対策を行いながらの出前授業

出前授業を実施するにあたり、ソーシャルディスタンスの確保や消毒等の感染症対策を行いました。

土器観察とまが玉の授業であれば事前に手洗いや消毒を済ませてから授業に参加していただくようにして、授業後に再度、手洗いや消毒を行っていただきます。昔の道具体験の授業では、道具自体の消毒が難しいため、道具を触るごとに手を消毒していただくようにしていましたが、消毒液で手が荒れてしまう場合等は授業が終わってから手をしっかりと洗っていただくようにしました。

より安全に授業を実施するために、学校側にも密にならない広い活動場所の確保、手洗いや消毒、空気の入れ替えを行っていただく等様々な面で御協力いただきました。

御利用いただいた学校からは、「児童の動きや時間の流れなど細やかな部分を丁寧に打合せできたのが良かった。」「実際の道具の重さを体感することができ、日々の学習につなげられた。」「夏休みの自由研究のテーマに選ぶ児童がいた」等の嬉しいお声を多数いただきました。　　（学習支援担当　川又奈津記）

歴史と民俗の博物館は開館 50 周年を迎えました！

当館は、令和３年 11 月に開館 50 周年を迎えました。前身である県立博物館は、昭和 46 年(1971)に埼玉百年記念事業の一つとして開館しました。その後平成 18 年(2006)に岩槻にあった県立民俗文化センターと統合し、新たに県立歴史と民俗の博物館としてリニューアルしました。

多くの方々に支えられて、50 周年を迎えた当館は、令和 3 年 9 月 28 日(火)から 12 月 19 日(日)まで記念事業を実施しました。

当館の歴史や歴代「特別展」のポスターを紹介したり、当館を設計した前川國男(まえかわくにお)氏とその建築を紹介するコーナーを拡充したり、県立川越工業高等学校と連携して記念ポスターを作成しました。

1　博物館の歴史を振り返る

エントランスロビーの一角で、建設当時から現在に至る当館の歩みを年表や記録映像、スライドショーで紹介しました。開館セレモニーや当時の館内の様子を記録した映像などもあり、昭和の時代を思い出すことのできる映像に足を止めてご覧になるお客様も多く見られました。

2　特別展ポスター展示

前身の埼玉県立博物館から「特別展」として開催された展覧会は計 123 本ありました。この特別展の中から、第1回開館記念特別展「埼玉百年史」、新装開館記念「武蔵武士」、入館者数最多の「さいたまの鉄道」、海外展「クイーンズランド文化展－姉妹州の4万年の歴史－」の4展は実物のポスターを掲示し、残りは縮小し一覧にして掲示しました。

「特別展」ポスター展示風景

また、特別展ポスターの総選挙を実施し、来館者にお気に入りのポスターを選んでもらいました。

開催中の「埼玉考古 50 選」に票が多く集まりましたが、昭和 40 年代、50 年代のポスターの人気も高く、職員にとっても興味深い結果となりました。上位 10 位までは当館ホームページに公表していますので、ぜひご覧ください。

3　前川國男建築講演会

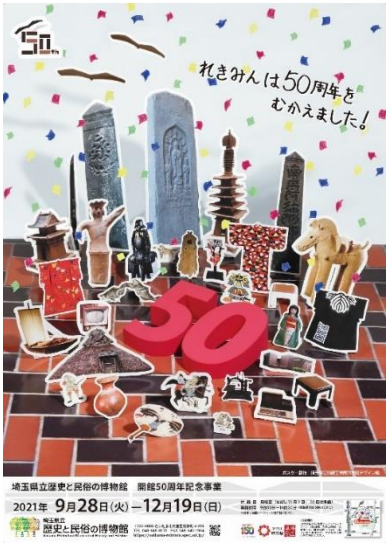
当館は日本の近代建築の礎を築いた一人、前川國男によって設計されました。50 周年に合わせて前川建築設計事務所の橋本功(はしもといさお)所長に前川國男の建築に対する思いや考えなどをご講演いただきました。当日は、建築に興味のある方を中心に多くの方にご来場いただきました。前川氏の建築に対する哲学、当館を設計するにあたってのこだわりを知り、より一層この建物を大切にしていこうと思う講演でした。

また、前川建築の特徴の一つである「打込みタイル」工法の解説パネルを作成するなど、建物としての魅力をより伝えられるように工夫しました。

4　開館 50 周年記念ポスター制作

50 周年記念事業では、県教育局高校教育指導課の紹介で、県立川越工業高等学校デザイン科とコラボレーションし、ポスターを制作することができました。

当館の代表的な展示資料や建物の特徴を取り込み、3Dプリンターで製作された立体模型を使用した独創的なデザインに仕上がっていて、館内を彩ってくれました。



県立川越工業高等学校デザイン科の生徒が作成したポスター

そのほかにも、当館の昭和の原っぱで育てている蓼藍(たであい)の種をプレゼントしたり、記念グッズを作成したりしました。

この 50 周年記念事業に合わせて、改めて当館の歩みを振り返り、諸先輩方の工夫や努力を再認識しました。先輩方に負けずに、これからも多くの方に親しまれる博物館を目指して、様々な工夫を積み重ねていきたいと思います。

（企画担当　倉澤　麻由子）

前川建築の紹介、はじめました。

1 はじめに

当館の建物は、日本の近代建築の礎を築いた一人、前川國男（以下「前川」とします）により設計されました。建設当時から注目を集め、数々の建築賞を受賞しました。

50 周年記念事業では、館の建築をこれまで以上に情報発信する機会と捉えて6つの取組みを行いました。

2 取組みの内容

（1）前川國男建築講演会

令和 3 年（2021）年 11 月 3 日、株式会社前川建築設計事務所所長の橋本功様を講師としてお招きし、「変わらぬ『たたずまい』～この博物館が語る前川の希求～」と題してご講演いただきました。

前川の生い立ちと当時の社会背景などを踏まえ、作風とその変遷を追い、どのような考えで当館を設計したのか繙いていただきました。さらに、全国各地の前川建築の見どころとディテールについてもお話いただきました。

講演の要旨は、「埼玉県立歴史と民俗の博物館 紀要第 16 号」に掲載していますので、あわせてご覧下さい。

（2）冊子「れきみん 前川建築のすすめ」※1

当館建築の見どころをイラスト・写真でストーリー仕立てに深堀りした「前川建築のすすめ」（18p）を講演会同日から HP に掲載しました。また、令和 4 年(2022)年 1 月 27 日から紙版を館内で配布開始しました。

（3）建築イラストマップ※2

3 月下旬から、建築イラストマップを館内で配布開始します。鳥の目で俯瞰したように建築の見どころがひと目でわかる、鮮やかなイラストマップです。

（4）前川國男紹介コーナーの拡充

エントランスロビーの一角に設置する前川國男紹介コーナーに、講演会同日から新たに仲間が加わりました。

①打込みタイル模型

館の外壁を覆う鎧のような、通称「打込みタイル」の模型です。タイルを「貼るのではなく打込む」、前川が考案した特殊なタイル工法を図解した模型です。

②県内前川建築 3 館※3打込みタイル比較展示

県内 3 館の壁の打込みタイルは、焼き方、色や大きさが建物ごとに異なります。場所や環境に合わせて素材を使い分けた前川のこだわりが垣間見えます。

（5）新聞掲載

10 月 17 日から 11 月 7 日までの毎週日曜日、埼玉新聞文化ワイド面に開館 50 年を振り返る記事が連載されました。10 月 31 日には、「地域に根ざし風格増す前川國男設計の名建築」と題して当館建築をご紹介いただきました。

（6）オリジナルグッズの製作※4

①ポストカード

11 月 24 日から 12 月 19 日の 8 日間、建築写真家の吉村行雄氏が撮影したエントランスロビー写真のポストカードを観覧者に進呈しました。「良い写真が撮れるかは撮影前に決まる」との考えで入念な撮影準備を行う吉村氏の写真は、建築の本質を見事に捉えています。

②測量野帳

趣味での利用など幅広く活用されるミニノートである測量野帳。愛好家から「野帳」の名で親しまれています。その野帳に、当館学芸員が館の設計図をモチーフにデザインしたオリジナル測量野帳を製作しました。

③クリアファイル

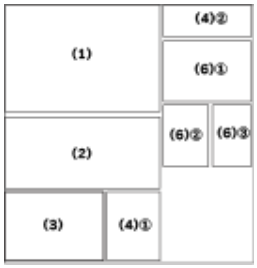
おもて面に当館収蔵資料、うら面に館内外の写真を掲載したクリアファイルを製作しました。展示はもとより、建築も含め様々な角度から博物館をお楽しみください。

3 終わりに

近年、前川建築を含めた戦後の近代建築が地域の魅力向上に寄与する事例、近代建築を楽しむ方が増えています。今後も当館の建物が、来館された方々や地域の皆様に親しみを持っていただけるよう発信してまいります。

取組みの実施に当たり、多くの方々のご協力を賜りました。改めて感謝申し上げますとともに、今なお建築ファンを惹きつけてやまない前川の偉業に敬意を表します。

（施設担当 大野 樹）



（註）

1、2 紙版は、なくなり次第配布終了。

3 埼玉県立自然の博物館、埼玉会館、当館の 3 館。

4 ①は配布終了、②③は館内売店で販売中。